

会員の安全を守る「おにやんま」

登米市SCでは、屋外で作業する会員の安全確保のため、ハチやアブなどを寄せ付けな
い「虫よけおにやんま」の製作を令和5年1月に開始。2年間で4400個を売り上げた。



ハチやアブを遠ざける「虫よけおにやんま」の製作風景。製作中の表情は真剣そのもの。「きちんとしたものを作りたい」という熱意がうかがえる

作業中の虫刺されを 防ぐために

この日、「虫よけおにやんま」の製作に参加した公益社団法人登米市シルバー人材センターの会員は9人。活動を始めた経緯について、活動の発起人である水口美和事務局次長は、次のように振り返る。

「会員が屋外作業をする際は、就業現場にハチの巣がないか、ハチやアブが飛んでいないかななどを事前に確認した上で作業に入りますが、草木が生い茂って見えにくい場所や土の中に巣がある場合もあり、毎年数件は虫に刺される事故が発生していました。そうした状況を少しでも減らしたいと考えていたところ、令和4年度の宮城県シルバー人材センター連合会安全就業推進大会で、オニヤンマの模型に虫よけ効果が期待できることを知りました。ハチやアブ、ブヨなどは、天敵であるオニヤンマに捕食されることを恐れて本能的

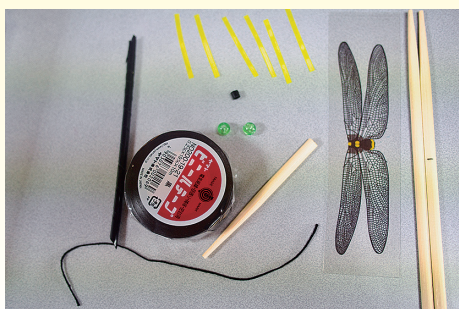
虫よけおにやんま。安全ピンで衣類に取り付けたり、ひもで玄関先などにつるしたりすることで虫よけ効果が期待できる



製作ガイドブックは、全ての手順に写真が添えられており、視覚的にも分かりやすい構成となっている



製作工程は「目玉作り」「胴体作り」「羽付け・封入」の三つに分かれる。中でも難易度の高い目玉作りは、経験豊富な会員が担当する



虫よけおにやんまの製作に使用される材料と道具。材料費に充てられるのはわずか20円だという

に寄ってこないのだそうです。それを機に、ボランティア活動をしていた約10人の女性会員に声を掛け、独自事業として活動を始めることになりました」

新聞報道で注文が殺到

活動開始に向けて、水口事務局次長は独自に「虫よけおにやんま製作ガイドブック」を作成した。

このガイドブックには、使用する材料や道具、寸法、製作手順などが写真付きで解説されており、誰にでも分かるようになっていた。加えて、1人で一つを完成させる

のではなく、製作工程を三つに分けることで、どれも同じ仕上がりになるように工夫されている。

令和5年1月から製作を始め2月までに160個を作り、会員に販売した。イベントでも扱ったところ市民にも好評だったという。

そこで、事業拡大に向けてセンターのホームページで会員向けに製作協力者を募集したところ、地元

虫よけおにやんまの作り方

- ①緑色のビーズの間に輪切りにしたストローを挟み、糸で固定し目玉を作る
- ②目玉をビニールテープで、胴体となる割り箸に取り付ける。まっすぐに固定するのが難しい
- ③胴体全体に黒いビニールテープを巻き付けたら、安全ピンを取り付ける
- ④ガイドブックに記載された図に合わせ、黄色のビニールテープを貼るための目印を付ける
- ⑤細く切った黄色のビニールテープで、オニヤンマ特有のしま模様を表現する
- ⑥最後に接着剤で羽を取り付け完成となる



の新聞社がこの活動を紙面で紹介したのである。それを契機に注文が殺到し、製作が追いつかない状況になった。多くの受注に対応するため、当初月1回だった製作日を5回に増やしたり、メンバーを増員したりして作業に当たることになったという。

虫よけおにやんまの完成まで

虫よけおにやんまの主な材料は、精巧な羽の模様が印刷されたフィルム、目玉となるビーズ、胴体となる割り箸、胴体に巻く黒と黄色のビニールテープ、そして、虫よけおにやんまを衣服等に取り付けるための安全ピンなどである。それらをハンマー、ニッパー、ペンチ、ハサミ、ドライバー、接着剤、ペン、虫が嫌がるというハッカ油を用いて作り上げていく。

最初の工程は、オニヤンマの目玉作りである。目玉となる緑色のビーズの間にストロー（黒のビニールテープを巻き、輪切りにした



製作活動の当初から参加しているリーダー的存在の佐々木とし子さん。「自分たちの作ったものを買ってもらえることがうれしい」と笑顔を見せる

作業合間の休憩時間も楽しみの一つ。会員の仲の良さと、そこから生まれるチームワークは、物作りには欠かせない



センター入り口で販売されている虫よけおにやんま。より多くの人たちに届けたいとの思いから、販売価格は300円のままで



購入者から届いた手紙には、息子さんとの思い出がつつられていた

販売価格は、より多くの人に購入してもらえよう1個300円としている。その結果、令和5、6年度で4400個を販売し、収入は132万円に達した。

販売価格300円の内訳は、250円が製作した会員への配分金、30円が事務費、20円が材料費となる。水口事務局次長は「価格を低く設定しているため利益にはつながりませんが、ボランティア活動をしていたメンバーで事業を始めたこと、虫よけおにやんまがセンターのPRにもなっていることから値上げはしていません」と話す。

2年間で132万円の収入に

もの）を挟み、黒い糸でつないで結ぶ。その目玉を規定の長さにカットした割り箸に黒のビニールテープで固定し、胴体部分に黒のビニールテープを巻き付けて安全ピンを取り付ける。黄色のビニールテープで模様を付け、最後に羽を接着すれば完成だ。

写真右から、登米市SCの水口美和事務局次長、
佐々木茂智常務理事兼事務局長、鈴木晴香主事



登米市内のイベント「とめまる」に出展した際は、虫よけおにやんまを販売するとともにワークショップを開催。子どもも参加して、大いに盛り上がった



虫よけおにやんまの製作に携わるセンターの女性会員の皆さん。
彼女たちの手によって一つ一つ丁寧に作られる

製作に当たる会員のモチベーションも高く、製作が追い付かないほどの売れ行きを喜び、やりがいを感じているという。ある会員は「メンバーが良い人ばかりなので、一緒に物作りをするのが楽しい」と笑顔を見せる。別の会員は「商品として販売する以上、きちんとしたものを作らなければいけないという責任がある」と語る。

地域での交流を生む活動へ

最後に、水口事務局次長は活動の意義について次のように述べる。
「ある日、『虫よけおにやんまを見て、今は離れて暮らす昆虫好きだった息子のことを思い出しました。これからも頑張ってください』という手紙をもらいました。この活動は、もともとは会員を虫刺されから守るために始めたものですが、地域の人たちとの交流にもつながりました。これは、大きな成果だと感じています」

(川上和義)